

堀崎 茂さん

(NPO法人東京里山開拓団代表)

荒れた里山を価値ある場に

里山からの人の撤退は、野生動物の進出など多くの問題を生じさせている。そうした里山の環境保全を、児童養護施設の子どもたちと手がけ、子どもにも大人にも社会にも価値のある場づくりをしているのが、「東京里山開拓団」。代表の堀崎さんに話を聞いた。

里山開拓で、子どもたちのふるさとづくり

—東京里山開拓団では、どのような活動をされているのですか？

メインは児童養護施設の子どもたちとの里山開拓です。八王子市美山町の私が所有している山林に、ほぼ月一回のペースで子どもたちと通い、里山を維持する環境保全活動と、児童養護施設の子どもたちの「ふるさと」として活用していく児童福祉活動を同時に進めています。



●ほりさき・しげる 1971年愛知県生まれ。児童養護施設の子どもたちとの里山開拓には、9年間で400名の、家族と離れて暮らす子どもたちが参加。グッドライフアワード環境大臣賞最優秀賞受賞。週三勤務のサラリーマン、個人投資家、DIY好きの二児の父でもある。東京里山開拓団HP <http://satoyamapioneers.web.fc2.com/>

場所がほしかったんです。秘密基地的なものが(笑)。アウトドアが好きなのですが、キャンプ場や登山にはルールがありますから、勝手に木を伐ったり、土を掘ったりはできません。自分で思うように手を入れられる場所がほしいと思っていたところ、八王子に住む親戚が何十年も入ったことのない山林を持っていると知り、お願いして使わせてもらいました。

二〇〇六年から一人で開拓を始め、手作業で木や草

開拓作業は、子どもたちとごく自然に進めています。山道や広場を歩きながら地面を踏みしめたり、落ちていた木や石を拾ったり、広場の下草を刈ったりすること自体が里山環境の保全につながります。さらに子どもたちと一緒に伐った木を使ってブランコやツリーハウスを作ったり、石と粘土でかまどを作ったり集めた枯木で焼き火料理をしたりと、開拓作業で見つけたものを子どもたちと工夫して活用するようにしています。

—活動を始めようと思われたのはなぜですか？
もともと私自身の趣味のためでした。要は自分の

を刈って道をつくり、二年がかりで頂上までのルートを開拓しました。最初は入る道すらもなく、頂上がどこかわからないほどの荒れ方で、「これを自分の手で伐り拓いていくのか」と思うと、本当にワクワクしました。

—ゲンナリじゃなくワクワクだったんですね(笑)。
道づくりをかなり進めたところで頂上まで行くのが難しいルートだと分かり、また入り口から道を作り直したりと、作業は三步進んで二歩下がるような状況でした。でも、少しずつできてきた秘密基地に家族や友人を連れて行くと、みんなが「また行きたい。あんな場所はない」と言ってくれる。何も無い不便ところなのに、自分で木を伐ってハンモックを吊って焼き火料理をする——そんなことでもみんなが喜んでくれる。ということ、里山には人の心をパツと開いてくれる力があるのだらうと思ひ、その力を誰かのために使いたいと考えるようになりました。

—そこで思い浮かんだのが、学生時代にボランティアをしたことがある児童養護施設の子どもたちの顔でした。虐待、貧困などさまざまな理由から自分の家と一緒で暮らせない子どもたちにとって、私がワクワク